洪水で破堤を防ぐ水防工法

県央工業高校水防工法演習　本番さながらの雨の中で

20分で250袋の土のう作り　半円形に積み上げ固めて

高さ50センチで月の輪工築く

三条地域振興局と、県立新潟県央工業高校（木村栄一校長）などは十日午後一時半から三条市月岡地内の五十嵐川遊水池で「水防工法演習」を開き、同校の建設工学科都市防災コースの二年生十六人が、洪水時に堤防の破堤を防ぐための水防活動を体験した。

この演習は、建設業界の仕事の一つである水防活動を生徒たちに体験してもらうことで業界への理解を深め、やりがいを感じてもらおうと、同振興局地域整備部と同校、新潟県建設業協会三条支部（小柳卓蔵支部長）、三条市建設業協会（久保克幸会長）の四者で、昨年に続いて企画した。

この日は三条市消防本部警防課の指導で、同校の二年生十六人のほか、県建設業協会三条支部クリエイトクラブ（青年部）の会員二十五人、市建設業協会の会員六人、地域整備部の職員十三人の計六十人が力を合わせ、漏水部分を包むように半円形に土のうを積み上げ、堤防の破堤をを防ぐ「月の輪工」を作った。

同地域整備部の諏佐夏夫部長は、「三条市では7・13水害、7・29水害と二つの大きな水害を経験し、全国では昨年の西日本豪雨など、毎年のように水害が起きている。新潟県も先日梅雨入りし、雨が多い時期になった。今回は水防演習を通して地域を守るという使命感を感じてください」とあいさつした。

作業は一班八人ほどの七班に分かれて進め、土のう約二百五十袋を作ったあと、五段ずつ積み上げて半径一・五㍍と二㍍の半円形を二本作り、二本の土のうのアーチ間の空間を土で埋めた。

作業が始まると強い雨になり、生徒たちは「寒いし、ぬれたくない」だったが、建設業者たちは「水害時はもっと激しい雨の中の作業になる。よい本番に近くていい体験になる」と生徒たちを激励していた。

土のう作りでは、建設業者たちはすべての袋に半分ずつ均等に土を入れていたのに対し、生徒たちは口が縛れないほど多かったり、三分の一ほどの量だったりとバラバラで、消防職員は「水防活動は時間と正確性が重要。土のうが重すぎると運搬に時間がかかるし、大きさがバラバラだと積んだときにすき間ができやすい」と指導した。

二十分ほどで二百五十袋の土のうを作ると、内側の半円形から積み上げ、運動部に所属する力自慢の生徒たちは積極的に土のうを運んだほか、積んだ土のうの上を歩いてすき間を埋めた。

その後、積み上げた二本の土のうのアーチと同じ高さになるように間を半分ずつ土で埋め、最後にブルーシートをかぶせて排水用のパイプを通し、一時間ほどで高さ五十㌢ほどの「月の輪工」が完成。雨で、消防職員は「水防活のため、予定より三十分ほど早い午後三時ごろ終わった。

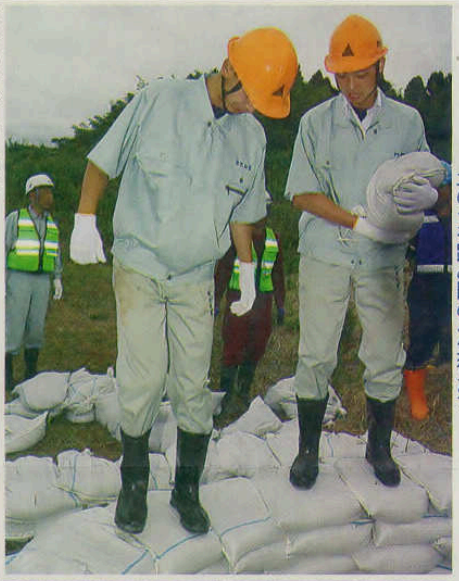
参加した同校の山崎真寛さん（二年）は、「初めての経験だったが、やりがいを感じた。将来は建設業に携わり、水防活動で地域の安全を守りたい」と話していた。

「地域を守るという使命感を感じてほしい」と諏佐部長

土のう袋を作る生徒たち

アーチの間を土で埋める生徒たち

土のうを積み上げる生徒たち



土のうを踏み固める生徒たち

完成した高さ五十センチ、幅約四メートルの「月の輪工」

三條新聞　2019年6月24日